

の時に建築されたもので、石垣と共に往時の威容を  
復ぶことができるのである。

廢藩後は、ここは國有となり、明治六年より佐伯小  
学校が開設され、明治四十三年まで佐伯教育の歴史  
的場所ともなつた。

しかし、明治三十四年毛利家の城山還原（松下山）と  
共に、この三の丸も毛利家の私有地となつてゐる。  
佐伯市はこの歴史ある三の丸を選んで、豪華壯麗な  
市民文化会館を建設しようとしている。それは期待  
すべき文化の殿堂である。

長い間、城山のシンボルとして親しまれてきた三の丸  
御殿は、佐伯文化会館敷地として使用されるため、住吉  
浜に移転しました。これは船頭町区の方々の御尽力によ  
るもので、見事に復元され、住吉御殿と命名されました。  
昨年十一月六日、待望の文化会館の起工式がとり行な  
われ、工事の槌音が城山に連日こだましていきます。本年  
十月末の完成を目指して。施工は大分市佐藤組。

佐伯市制施行三十周年に当る昭和四十六年度は佐伯市  
にとっては勿論、三の丸についてもまたことく画期的な年  
となつてゐます。

（註）昭和十六年十一月六日、佐伯町、大久壽、八幡、西上浦合併して  
佐伯市となる。

二つの方がいへ余白を生かして

○今日の、毎日の出来事ごとのすゝり、五十年、百年の後世に向けて意義をも  
つ歴史的文書を、明確につかんで記録はどうあつて、例えは市慶祝会館  
の建設とか、重要港湾佐伯港岸壁の建設とか  
○又函古、昔からあるがどうぞおさねて行く。城下町の面影、開港の姿を  
まだ残している街の建物、物語をもつて、川べりや小溝や吉井戸や生垣や  
樹木、今までお残したい止むを得なければ字裏紙などつて

以上

飯田・楊場・そして塩浜

一西南の役につながら聞書一

会員 安 部 力

増村隆也著「佐伯郷土史」後篇、西南戦争と佐伯地方

の項に、「同書二〇八頁所載、前後省略」

五月二十五日（明治十年）午後二時、敵兵三百人日

三隊に分れ一隊は城北馬場先より、一隊は城南池田  
村より番丘川を渡り、一隊は切通しを経て角石より

進んで佐伯城下に何の抵抗も受けず突入し、警察署、

用務所、裁判所、学校に乱入して建物を破壊し、蟹田、楊場の海岸に歩哨線を張り、城下の首の迷惑に

備え、警官、巡査の行方を懸命に捜し求めた。

翌五月廿六日午前六時、県庁より情報を受け左城  
間艦（大入島守護）は来て小艇を下し斥候を上陸せ  
しめ、敵兵は塩浜の堤防下から射撃され、水兵

二名及び死亡、數名の負傷者を出して、辛うじて帰艦

した。之を知つた清閑艦及砲門を開き、午前十時から午後三時迄六十三発の砲撃を加え、敵軍を撃退した。

翌二十七日、敵兵は一度佐伯城下を引揚げ、廿一日

以不日秋が右引用文に関連のある蟹田、白坪で収録し

在此の西南の役の体験談の翻書へ又聞きしと、その現場は  
ついての考察である。

○白坪の田家の主人へ話してある。『祖母は慶應三年  
生れ當時（明治十年）は十一二才であつたが、  
盛んに大蛇の聲が鳴んで来るので、牛を疎開させる  
べく白坪天神の近くの家から山の方に牛と索ひて行  
くと、休んでいたる賊兵の一隊と出会つた。その前を  
恐るゝ一通つていると、「美味しい牛だ」殺して  
食がうか」という賊兵の諸が耳に會つた。此の時か  
ような恐ろしかつて其事は無かつて、と祖母又曰辭に  
話してい矣。

○又祖母は對才前後で書の傍流りから駿河船越の兵  
隊を上陸せし時左辺に雇われて、賊兵熱攻撃からや  
つとのがれに兵隊を乗せ、引揚する小舟を漕ぐゆえ  
隊長が抜刀して振り上り、早々漕げて昇  
く漕がる事即ち切刃ぞ、舟も燃え、息巻き根元  
ばかりに漕がる時、恐る運びて以終生忘れ事は出来  
ない事と皆是第津川より、駿河り出る事か、即ち  
○戦の最中毎日何十となく血の跡り左臂補をば人足が  
かついで未ては定められ左所でなく、次々と穴を掘  
つて封締めて行つて吉。現在のようにきちんと整つた  
墓地とまつた後の事である。まだ誰が多分  
の序が大部分忘れてしまつた。

○某家は楊場で蓑笠など荒物の商賣をして居左が、賊  
軍が城下深處へもぐらば縫合せ去難か難と  
はせぬ逃がるのに、百姓姿に変装して海岸線に疎開  
す為に、蓑笠は太古未だ売生業をして来た左業者  
と申した。

この事の話に出て来る塩浜、楊場とはどの地點を言つ  
てあるか。古昔民間の話と見て取れるうるが、

駿前から陸路か海で、馬鹿の島、入島、高瀬、  
今ノ様に駿やかな町並が、大  
出來るのは、古より古より食はる事  
とではなき矣である。戸数少  
も蟹田、楊場、平野、葛と合せ、  
て四五十戸をそして白坪村の中には  
含まれ深い矣よ。

楊場とは駿前平野富浦造船会社の前へ、  
かく、岸会官義雄翁の宅の前の通りを以て  
土地へ入済今既におり、石畳で、五、六、七、八  
段あり、汐満潮夜時、氷漲加三半程出の方そぞれに  
こは大分島船主浦方面の船が常て以て居る。

又塩浜と云ふ一帯塩田から六番塩田まで、漁業、命の二半  
令放ぬ前より通りが反対、塩田外側の土手に当り、塩浜の  
土手と呼んで居左。此の土手の斜延がて、賊軍兵士が待ち  
伏せ、上陸其不來る時候、兵を射撃し、死傷者數名を出一夫  
ので、出づ疾然、遂の正確な地點は、の邊が不明である。

そして次の土手は坂野浦橋通するトンネルの不透水まで  
へべきへ現在の道路が土手の跡と窓うと、改めて萬に通  
ずる旧道に沿ひて鉄道線路の導き近塩小舟の出入する水  
路が有り、この地点が右一番塩田がはじまり、二半令放  
の角か三番塩田と水沼産業の所迄、五番塩田と六番塩田  
は興人社宅街高所に隔てて、一番塩田から五番塩田迄皆令  
放农作の畠、玄耕夫を育ててと云ふ。此の塩田即  
ち塩浜何年頃出来、どんな形で運営され、どれほどの生  
産があつたかである。

それから水沿医院横の下水溝物出たりから、小野富浦会社  
の間に、数個の自然池があり、毎年一回、鰐、鮭などを取  
る日が定められ、毎年、此の日は一年中の樂しみの日で  
お湯うが。古昔民間の話と見て取れるうるが、

更に蟹田の今ノ税務署の地点はモ船着場があり、  
旅人を本邦へ、板の部分を土中に刺した桟が茶店があり、  
兩翁

「五所明神の入江は水が美しく、夏になると子供達の泳ぎ場であり、冬は真黒にし左カツバ連中が、水シグキをかき揚げたり、冬ニテハ左セラ友。そして東小学校横の桜並木の土堤から

踏查記錄

昭和四十六年一月三日

金外五十金作氏陰西靜大字  
大元開川王氏

2

今口から縣一カクで来て風戸山の権谷まで、岡田文三郎  
氏の家に余當まと道を整備して山道を整る。松の造林、櫟  
林整定の中を通り海拔四〇〇米位と思われるあたり、昔の  
樵道が出て、右は天門の長畑、左は本益林に通する山道で  
ある。足も音く、歩きく、勞りく、勞かい日である。  
左手高く椿山が仰がれてゐる。山道は山の鞍部でかか  
る。右手又尺ぬの奥、左手は風戸山竹原部落の上の方であ  
る。本立井林業の共同林だといふ。  
椿山の鞍部でとづつて山道は、とたえ陽日へいく。  
（山道）

尾根は薄木か岩角からみ、僅かに道がへりへりる。  
自然と足歩軍ぐなり。  
全員六百五十八、八木の廻上に揃つたのは十一時。ま  
ことにすほらへ。木の芽うねるほど風もまく空は晴  
れたり、眼下に番川が自く光り、梅半札が低くしまく見  
え、その向うに佐布市街、そして佐伯湾が見え。  
東口は考岳と天間山が程んど重なるようて望す。そ  
れどやうの胡麻坂山が高く、北には西分に備捕山、  
それから西にかけて傾山、祖母の連山、そり手前に六百  
八十メートル、米花山、鳴鹿山、南に元遊山と、  
リリと三百六十度、山又山の大饗宴と言えよう。  
何故かの事奥セつたり、持參の密相をあせ合つたり  
生樹が多し。山の名のよつて生ませた椿林の中を降つ  
る道、JR山、かなり狭め大足を急がせて下つた。  
「へへ」

椿山で荷物へたゞ萬足駄、よみこみへひだり  
から岡田氏下等がおで下山にかかる。おみちに梅の  
生樹が多し。山の名のよつて生ませた椿林の中を降つ  
る道、JR山、かなり狭め大足を急がせて下つた。

ら、網を打つていた時代もあつたとのこと。  
此の様な、古考の談を聞いて見ると、景色も愛り地名  
もなくなり、隣がであつた塩浜のお方り、一時は幾々の  
場と有り、今は終ましくもない廢音と公害が渦中に沈む  
めりていひ。隣かであつた昔が恋しいと思う。(おおや)

さすその山頂はすぐ右に見えたが、奥山道風見  
立山から参加の陰西氏が守護で、細々と  
「かうな」。青山から参加の陰西氏が守護で、細々と  
「かうな」。山頂を上手に一行を導いてくれる。  
とくべ、梅山の西側はまわって猿道を述べて、やつと  
高木会長が往生登つたといふ。おれ蔵さんの前で建す  
る。つまり梅山の西北にさかづたあげて、おうりは見て二  
年、三年前は梅山小学校が植えられていた。見廻してもよ  
く歩くのも樂い。宿元氣を経て登里。

岡川宿に帰つてはが諸方氏が行つてゐるといふので、寺  
虚雲の古塔を見ゆかく。玉露塔が十数基寺跡と思われ  
る立場、まあほど古き時代は八十何年前聚落があつた  
と伝へられてゐることの一つの裏證だと一々する。  
椿山連峯を北に隔て山のようだ、そして南に向つてやる  
が傾斜をもつ高標の地稚谷、急がへり見るとおち、  
ちに茶の花が咲き、蜜柑樹が多々、冬も花んどの霜が  
ないといふ温潤の地である。それがこそ山村過疎の弊  
代であるべし、不便な三三百六十米の高所に年々漸く  
代へるが、老いた十歳前後の建物をもつた家が、二

奥からかゝるその奇勝をすぐここに生まう  
ニセと並んですぐ下界に鐘乳洞があり、谷の古葉  
道路の上に高くそびえる石灰岩の岩峰をさす下に鐘  
乳洞(こうもくろうどう)があるが、もう時間が餘  
歩で約三分でバス停へて、ちよと待つてバスで  
乗つた。元気な連中は車のむいてある余地まで走  
るが、  
地獄谷、鐘乳洞、蝙蝠穴のある白岳には、残念ながら  
出でられぬは、いけば、や格山にも又登りない。  
ほんとによく一日があつた。